

特定非営利活動法人(国認NPO) 柔道教育ソリダリティー

第13 回講演会

「平和でないとスポーツはできない」
長田 清左

2012年12月7日(金)
於 日本教育会館9階

光本..それではNPO法人柔道教育ソリダリティー第13回講演会を開催します。本日は師走のお忙しい中、たくさんの方さまにお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。私は事務局の光本と申します。どうぞよろしくお願いたします。皆さまのおかげで本法人の講演会も13回目を迎えることができました。長きに渡って続けてこられましたこと、重ねて御礼申し上げます。それでは本法人の理事長、山下泰裕より挨拶と、本日の講演者である長田清左さんのご紹介をいただきましたと思います。よろしくお願いたします。

2012年度の活動について

山下泰裕

(NPO) 柔道教育ソリダリティー理事長・
東海大学理事、副学長



いつも、NPO法人柔道教育ソリダリティーの活動にご支援いただきまして、本当にありがとうございます。先ほどかなり激しい揺れの地震がありました。このビルがやや古く、9階ということもあり、この下が震源地ではないかと思うほどでした。今日は学生も講演会を手伝っておりますが、学生たちの前で少し格好の悪い姿を見せてしまいました(笑)。震源は東北、宮城の方ということで、津波警報も出ているといえます。少し心配しております。大きな被害が出ないことを、切に願っている次第です。講演会の開催に先立ちまして、この1年間の活動について簡単に報告させていただきます。

柔道教育ソリダリティーの主な活動の一つとして、柔道用品(柔道衣・畳)を海外に広める支援活動を行っています。今年は、コロンビア、サモア、エジプト、ミャンマー、スワジランド、ペルーの6カ国にリサイクル柔道衣を送付しました。ミャンマーには合わせて畳99枚も無償で提供しています。

また昨年同様、イスラエルとパレスチナから柔道指導者を1名ずつ受け入れました。11月半ばから12月半ばまで1カ月間という短期の受入れです。この後の懇親会で皆さまにも紹介があると思いますので、大いに交流を深めていただければと思っています。

ロシアからは先日、若手の女性柔道指導者2名が来日しました。今後のロシア女子柔道を担う若手指導者として、これから約8カ月間、日本の柔道の研修を受けていただく予定です。この方たちも後ほどご紹介があるかと思えます。

選手の受け入れ事業では、アフガニスタンから女子柔道選手を招けました。今年開催されたロンドンオリンピックを目指して、昨年、12

月から7カ月間受入れた選手です。残念ながらロンドン五輪には出場できませんでした。6月の総会の時に、本人の挨拶がありましたので、ご記憶の方もいらっしゃると思います。

ボランティア学生については、ミャンマー、グアムの2カ所に、2名ずつ、計4名ほど派遣しております。中国との交流では、橋本副理事長が中心となって、尽力くださっています。その一貫で、中国人の少女が登場した中国語版初心者用『柔道教則本(柔道入門)』を作成し日中友好青島柔道館と日中友好南京柔道館を通じて、中国の方々に贈呈させていただきました。

私自身の活動としましては、6月から7月に外務省文化・スポーツ交流ミッションのメンバーの一人としてミャンマーに行きました。

9月には、APECが開催されたいたロシア・ウラジオストク市へ、日本の柔道をロシアに広めるため出かけました。現地では、ロシアの格闘技「サンボ」をつくったオシエプコフの生誕120周年記念式典が行われ、そのイベントにも参加してきました。

今は、日中・日韓の領土問題が大変厳しい状況にあります。今年の3月、私は日中友好南京柔道館の2周年記念行事に参加することになっていました。橋本副理事長がお作りになった柔道教則本を贈呈するほか、日本から学生柔道連盟の学生を率いていく予定でした。また、日中友好の一貫で南京大学での講演も計画しておりました。ところが、出発の1週間前に、河村名古屋市長による南京問題への発言があったため、訪問は延期になりました。

今年には日中国交正常化40周年です。これを記念し、NHKのBSプレミアムで、柔道教育ソリダリティーが取り組んでいる南京・青島での交流活動が40分間の番組として紹介されるはずでした。9月下旬に話を詰めて、11月頃に現地に入る予定でしたが、中国とのドキュメント番組を作るには時期が悪すぎるという判断が下りました。こういう時期だからこそ、さまざまな交流を絶やしてはいけないとも思うのですが、NHKからの申し出を受け入れ、断念しました。

本日ご報告いたしました活動が継

続できているのは、お集まりいただいた皆さまを中心とする本法人の会員の皆さま、あるいは協賛いただいている企業の方々のお力の賜物だと思っております。この場をお借りいたしまして、皆さまのご支援・ご協力に、心から御礼を申し上げます。思いいます。ありがとうございます。

さて、本日は13回目の講演会です。私の昔からの友人で、かつては何度か取材をしていたことがあった長田渚左さんをお招きすることができました。まずは簡単なご紹介をさせていただきます。ありがとうございます。

長田さんは東京都出身で、桐朋学園大学演劇専攻科卒業。海外レポーターを経てフジテレビ系「FNNスーパータイム」で、10年間スポーツキャスターを務めておられました。わが国における女性スポーツキャスターの草分け的存在で、女性スポーツジャーナリストの第一人者でもあります。また、NHKの若者向け番組「FMホットライン」の番組編集長としても長く活躍され、現在は、日本ペンクラブ会員、ノンフィクション作家としても活動されていらっしゃいます。淑徳大学客員教授、日

本スポーツ学会代表理事、『スポーツゴジラ』編集長など、幅広い分野で活躍されながら、日本のスポーツ界のあり方について提言をされています。私も今日の講演を大変楽しみにしてまいりました。演題は、「平和でない」と、スポーツはできないです。長田さん、本日はよろしくお願いたします。皆さま、ご静聴ありがとうございます。ありがとうございました。

— ありがとうございます。それでは長田さん、よろしくお願いたします。皆さま、どうぞ拍手でお迎えてください。

「平和でない」とスポーツはできない」

長田 渚左

（日本ペンクラブ会員、ノンフィクション作家、淑徳大学客員教授、日本スポーツ学会代表理事、『スポーツゴジラ』編集長）



過分なご紹介をいただきまして、山下先生、本当にありがとうございます。柔道教育ソリダリティーの講演会には私もいつも参加をさせていただいております。いつもはそちら側の席に座っているいろいろなお話を聴かせていただいております。この度、講師をお願いいたしますというお電話を光本さんから頂戴し、実は、「これは困ったな」と思いました。

「山下先生にはたいへん長くお世話になってますし、お断りするわけにはいかない。けれど、どうしたものかなあ……」というのが、正直な気持ちでした。山下先生とのお付き合いは、本当に長いのです。また、私が代表理事を務めます日本スポーツ学会の講演会にも山下先生に来ていただき、とてもいいお話をいただいております。ですから、内心はやや困惑しながらも、本日は登壇しようとして強決意して参りました。

今のお話でもお分かりだと思いますが、山下先生はお話が大変お上手です。人を引き込むお力があるので、私はいつもこの講演会をとても楽しみにしていて、「山下先生は今年1年、どんなご活躍をされたのだから

う。今日登壇される方は、どんなお話を聞かせてくださるのだろうか」と思いながら参ります。ところが、今回は全く違った状況で参加させていただきますこととなりました。暮れのお忙しい中、選挙も間近で地震まで来てくれた大変な時分に、わざわざお集まりいただき、本当にありがたうございます。あまりお役に立てないことを散々申し上げましたが、そこはご了承いただきながら、お聞きいただきたいと思えます。

女性スポーツジャーナリストとして

スポーツに携わる人間を世に伝えるという仕事を30年以上続けてまいりましたので、山下先生の現役時代も拝見しております。また、あるときは、控室から出でこられた山下先生を追いかけて行って、インタビューさせていたこともあります。本日は、大好きな、尊敬する方に誘われるままに、やって参りました。長田渚左と申します。よろしくお願いたします。

イターあるいはスポーツジャーナリストでは、正確には私より前に走幅跳の元世界記録保持者である人見絹枝さんが活躍されています。私は大学では演劇科専攻でしたので、先日お会いした外務省の方から「どこでジャーナリズムを学んだのですか？」という核心に触れるようなご質問をいただきました。実は、私はジャーナリズムを勉強したことはございません。大学を出て直ぐにスポーツジャーナルの仕事に携わらせていただき、長く続けてきただけのことなのです。それも、書くことと話すことの両方をやってまいりました。両方やってきたという点では極めて稀有な存在だったかもしれない。ただ、無手勝流と申しますか、その辺でストレッティングをしている身でありながら、黒帯の方に向かって行ってしまったというのが最初でございます。もつと言うと、原稿用紙1枚目からお金に換えてきてしまったことになりました。ですからこれまで沢山の恥をかいてきました。けれど、それら全部を栄養にして、失敗も食べて、肥え太ってきたという感じです。日本のジャーナリズムの

レベルは世界的にみると低いので、私のような素人でも登場することができたとも言えるのかもしれませんが、皆さまよくご存知かと思いますが、山下先生の現在の指導ぶりやお話は、日本でもトップレベルです。ユーモアもお持ちですし、体格も面白いです。柔道が本当にお強かったことも含めて、世界に通用するとなってもない方だと思っております。そんな山下先生の来し方を、どのように振りかえつたらいいものかと考えながら、今日はやって参りました。

オリンピックメダルの秘策と取材秘話

以前、スポーツ界の秘策を集めた『こんな凄い奴がいた(文春文庫)』という本を作ったことがあり、私の出世作となりました。当時は、若くてカワイ子ちゃんだったものですか(笑)、「この本はどんな子が書いてるの？」と、しばしば好奇の目で見られましたので、「いまに見ておれ」と発奮したものでした。当時は、若くてかわいい人が文章を書くのはそぐわないというイメージが世間にあつたのです。仲人をしてくださった友人の北方謙三さんから、

「いつ書くのをやめるの？」と言われて続けてきました。それでもこれまで仕事を続けてこられたのは、私の中に書きたいこと、話したいことがたくさんあつたからなのです。

ところで、この『こんな凄い奴がいた』は、スポーツ伝といえれば努力と根性を伝えるのというのが主流だった中で、「秘策」に着目した本です。織田幹雄さんという方が、1928年に開催されたアムステルダムオリンピックの3段跳びで、日本人初の金メダルを取りました。今のネット社会のように情報を簡単に入手できる時代でなかったにもかかわらず、彼は対戦相手を綿密に調べ上げ、写真も入手して彼らの特徴を頭に叩き込んで現地に乗り込みます。コーチもいないような状況だったそうです。会場では相手選手の性格を分析した上で、「予選の3回戦で勝負がつくだろう」と考えて試合を展開しました。その結果、体が小さく非力な織田さんが、出場していた大男たちを次々と破って、見事に金メダルを取ったのです。

『こんな凄い奴がいた』では、どんなに頑張って練習をしてきたかな

どといった話には一切触れていません。そのときの秘策だけに焦点を絞って織田さんにお話をうかがいました。80年以上前に金メダルを取った織田さんは、90代でお亡くなりになったのですが、最後の取材に行ったのがなぜか私でした。その時に、「ここまでお話ししていただいていたのかな……」と思うようなことまでお聞きすることができました。

また、2大会連続で銀メダルを取った西田修平さんという棒高跳びの選手がいらっしやいます。彼が最初に銀メダルを取った1932年のロサンゼルスオリンピックでは、試合の直前に棒の先を15センチ切り、自分にとつて「これだ！」という長さにして挑んでいます。これも秘策ですね。この本の取材では皆さんの秘策だけを取り上げたのですが、中には秘策など全くない方もいらっしやいました。1週間かけて粘って聞いても「これじゃ書けない」となることもありました。このように、コストがとてかかる仕事なのです。

そうした中、実は山下先生にも秘策をうかがいに参りました。私は山下先生が現役選手だった時からずっ

とインタビューにうかがっているのですが、このときは、打てば響くようにお答えになる山下先生のシャープな頭脳に改めて驚かされました。山下先生は「秘策」と聞くと、口の右端だけで「クッククック」とお笑いになって、「ありました」とおっしゃったのです。そのときのことを紹介した映像があります。短いもので、ぜひご覧ください。

(以下、ビデオ映像より)

キャスター：われわれ日本人にとりましては、8年ぶりとなりました1984年のロサンゼルスオリンピック。そこで活躍した「凄い奴」といえば、この方です。

ナレーション：山下の金メダルは動かないと、世界中の誰もが疑わなかった。奴を倒すには原爆を使うしかない。右足腓腹筋断裂——。無敵の怪童が生涯最大の舞台上見せた幻惑の術とは？

モスクワ大会不参加で涙を呑んだ山下にとつて、初めてのオリンピックだった。満を持して望んだ1回戦は、

見事な一本勝ち。しかし2回戦で、思わぬアクシデントに見舞われた。内股を払ったそのとき、体重のかかった右足ふくらはぎに激痛が走った。肉離れ——重症だった。

山下は柔道を始めた小学4年生のときから、オリンピックで金メダルを取ることが夢だった。やっと立つことのできた念願の大舞台。そこで悲劇が待っていたようとは……。

準決勝、相手は執拗にけがをした右足を攻めてきた。堪らず、山下の体勢が崩れた。かろうじて勝ったものの、右足のけがは悪化する一方だった。

試合後の控室、右足の痛みは極限に達していた。両肩をコーチに抱えてもらわなければ、立つこともできない。ふくらはぎは、みるみる腫れ上っていた。無敵の王者、絶体絶命のピンチ。

決勝戦の相手、ラシユワンもまた、追い込まれていた。千載一遇のチャンス。しかし、卑劣な戦いをしたくなかった。どうすればいいのか。山下とラシユワン、2人の苦悶は刻々と深まるばかりであった。

山下：「どうやったら今の状況で力が

出せるのか。どうやったら勝つ可能性があるか。いろいろ考えました。でも、どうやったら勝てるのか、方法はまったく浮んできませんでした」

ナレーション：いよいよ決勝戦。試合会場へ向かう通路のことだった。窮地に立つ王者に、どんな戦いを挑めばいいか。ラシユワンの悩みは続いていた。

そこに山下がやってきた。とても戦える状態ではない。夢の金メダルまであと一勝。山下はラシユワンの顔をじつと見つめた。5、6秒してその視線に気づいたラシユワンが、山下に顔を向けた。一瞬、ふたりの眼差しが交差する。

山下：「目が合った瞬間に、私が笑ったんです。ニコッと……。そしたら彼が動きを止めてニコッと、すごくいい笑顔で笑い返してきました。そのときに彼の体からぐっと固まった気力とか集中、そういうものがスーッと抜けていく感じがしました。僕は、顔は笑ったけれど、心は笑っていなかった。そこで『あっ、しめた。これはチャンスがあるぞ』と思いました」

ナレーション：決勝のときがきた。ラシユワンは真正面から正々堂々と攻めた。山下の右足を狙い、大外刈りをしかけるラシユワン。懸命に防ぐ山下。続いて左払い腰、それを山下が崩した。

柔道無差別級金メダル。山下が試合前に笑ったのは、生涯のうち、あの一度だけだったのだ。なぜ微笑んだのだろう？ その微笑みが、ラシユワンにどんな影響をもたらしたのであるうか。2人の闘いは今も伝説となつて語り継がれている。

（ビデオ終了）

長田：見事に秘策を聞かせていただきました。203連勝、全日本9連覇の山下先生は、どの試合でも、試合前に笑った試しはなかったのに、ラシユワンとの決勝戦だけはほほえみを浮かべた。そこで、「ほほえみ返し」というタイトルをつけました。「たった一度」というところがミソだと思えます。映像の中にもありませんでしたが、「ラシユワンの体から何かが抜けていった感じがした」とおっしゃっていました。けれど山下先生は、笑おうと思つて笑つたわけ

はないそうです。「振り返ると、ちょっとだけしたたかだったかなと思つともおっしゃっていました。」

こういうことを聞いてくるのが、スポーツライターの仕事です。私は山下先生の話に、たまらなく震えました。そして、この秘策について話したのは初めてとのことだったとおっしゃった。そうでしたよね？

山下：そうですね。

長田：私は「こんなスポーツライター冥利に尽きることはない！」と思ひ、朝日新聞にも記事を書きました。いま映像をご覧になり、山下先生が何かおっしゃりたいようにお見受けしますが、ひとまずそれは置いておいていただきます（笑）。

この試合後、山下先生が痛めた足をラシユワン選手が攻めなかったフエアプレーの精神が世の中に広まり、ラシユワンに賛美の声が集まったりもしました。ですが、今日見ていただいた通り、彼は見事に攻めていました。決勝戦の前、山下先生が畳に座つて待っていると、ラシユワンが近づいてくる。腕を回す衣擦れの音が

するなと思ひながら聞いていた。そのときは何の秘策もなく、目を閉じてじつと座っていた。試合直前になつて、静かに目を開いたときに、ラシユワンと目が合った。そのとき、ほんの百分の一秒交わした笑顔というものが、あつたのかもしれない、なかつたかもしれない。しかし、ラシユワンは「ゆつくり攻めろよ」というアドバイスに反して、どんどんどどこ攻めていってしまった。そこには、本当に試合の「綾（あや）」といったものが見えると思ひます。

この本を書きたかつた理由についてご説明します。戸部新十郎の『秘剣花車』という剣豪小説を読んだときに、次のような場面に出会いました。晴天、無風の静かな風景の中に桜の木が植わっている。そこに、ふたりの侍が近づいてくる。2人の剣豪が交差し、行き交う。そこにサーツと風が吹くと、桜の花びらが一点に吸いこまれるように流れていく。一方の剣豪が揺れ出し、倒れていく。一体、何が起きたのか――。

「秘剣」というものが書かれた本でした。私はこの小説を読んだとき、「あつ、こういう場面はスポーツの世界にたくさんあるのではないか。私はこうした瞬間をたくさん見ている！」と思ひました。これが、『こんな凄惨な奴がいた』という作品を作ろうと思つたきっかけです。

この本が映像化された作品は、平成20年に日本民間放送連盟賞のテレビエンターテインメント部門で優秀賞を受賞しました。世の中、何が起ころか分からないものです。人から生で話を伺つて、それを表現できる仕事は、本当に面白いです。そして、人にものを伝える時に、どうすれば分かりやすくなるのだろうかと考えられるようになったのは、私がかつても運動音痴だったからだと思います。体育は常に「3」でした。運動会はまったくのところが嫌いの生徒だったので。「なぜ人前で走らなくてはいけないの？」「走ると地面が揺れる」などと思つていて、運動はまったく得意ではありませんでした。加えて、ぜんそく持ちの体の弱い子どもでした。いまでも時々ぜんそくが出るのですが、それでも昔とはずいぶん変わったなと思ひます。いまは骨太で、他人にはスポーツは何でもこなせそうに見えるようで、

昔は体が弱かったと説明しても分かってもらえないことが多いほどです。

『スポーツゴジラ』の創刊へ

山下先生との出会う中で、こういう本を作らせていただいたことがあるほか、『スポーツゴジラ』というフリーペーパーも作らせていただきました。これは年に3回発行している無料の冊子です。おかげさまで今回20号を迎えることができました。都営地下鉄の106の駅と60の大学で配布しています。スポーツを活字で捉えていただき、その感動をもう一度味わっていただきたい。また、人間を深く知るためには、活字が不可欠であることを強調して、作り続けてまいりました。東海大学には発刊当初から置かせていただいています。しかも東海大学様は送料も無料でいいよといったご配慮もいただき、一番丁寧で温かい対応をしていただいております。

「り安く済むよ」といったことを、皆さん言われました。でも、私は活字を信じています。たとえば、山下先生のお話を読むと、たいへん面白いので「また読みたい」と思うのです。それに、パラパラと本をめくる動作が、脳に非常にいい影響を与えると聞いています。ネットで膨大な量の情報を流し読みすると、分かったような気にはなりますが、「結局、何だったんだっけ？」と思うようなことが、私たち世代の人間には往々にしてあります。そこで、この雑誌は、引越しのときにも持っていつてもらえるような、価値があるものにして、心掛けて作っています。

さて、これからは山下先生にどのようなお世話になってきたのかについて具体的にお話してきます。決してゴマすりではありません(笑)。2004年のアテネオリンピックのときには、テロが頻発するなど、様々な事件がありました。古代の人たちは、戦争をする代わりにオリンピックを開き運動競技で競い合いました。私はこの精神が大好きなので、お互いがいがみ合って、血で血を洗うような戦争をする前に、一週

間か10日ぐらいオリンピックをやらなくって、話合いという原点に立ち返れたのではないかと思います。

そのような精神を忘れてはいけな

そのように、2004年のアテネオリンピックの開幕に合わせてタブロイド版の新聞を発行しました。これが創刊号です。山下先生と並んで一面に掲載されているこの美人の方は、アテネの市長さんです。この方は、前夫はテロの犠牲になっていて、ご自身も銃撃戦に遭遇した経験をお持ちという、なかなか骨太の女性です。この新聞を発刊するに当たって、皆さまにもご協力いただいたのを覚えていらっしやいますでしょうか？東海大学の方を中心に一人様2千円ずつ寄付を集めさせていただきました。そのときに「賛同いただいたのは、375人。虫眼鏡でご覧いただく程の大きさですが、その方たち全員のお名前をこの新聞に入れさせていただきますました。この会場にも、「自分の名前がある」という方がたくさんいらっしやると思います。「武器を捨てて、平和のためにスポーツをやろう」というメッセージもいただきました。



す。

いまから7年前、『スポーツゴジラ』を本気で続けていこうと思ったとき、私はず相談に伺ったのが山下先生でした。山下先生は、「柔道は勝ち負けだけの世界ではなく、一つの言葉として機能する力がある」ということを常々おっしゃっていたからです。そして、柔道教育ソリダリティーの取り組みにおいては、柔道のみならず、スポーツの重要性を説いておられます。それは音楽や食などと同じように、国境を超えたコミュニケーションツールであり、草の根的な外交手段になるとも教えてくださっていたのです。

相談に伺った際は、飛行機で熊本まで追いかけて行きました。熊本だったら、会議の後に少し時間を取っていただけると伺ったからです。先生、覚えていらっしゃいますか？ そのとき山下先生は、「テーマを大きく。名前も大きく。その名前の下にたくさんの方が集まると考えるといい。『柔道教育ソリダリティー』のように、ネーミングは大きくね」とおっしゃいました。

帰宅して、家でお茶碗を洗いなが

ら「そうだ、ゴジラだ！ これなら、

誰にでも覚えてもらえる！」とひらめきました。ゴジラの既存のものを踏みつぶしていくイメージも気に入っています。そこで、『スポーツゴジラ』という名前を考えました。「ゴジラ」に対するイメージは人それぞれだと思いますが、ゴジラは恐竜ではなく、東宝映画の持ち物なので。著作権に詳しい方に、『スポーツゴジラ』でどうでしょうか？と、絶対の自信を持つて話したところ、「何を言っているのですか？ 東宝が著作権を持つ名前ですよ。もし東宝に吉永小百合がいたら、長田さんが『今日から吉永小百合に名前を変えます』と言っているようなものですよ」と、とても驚かれました。さらに、「野球の松井選手のゴジラはあだ名ですが、ものの名前として使われるとなると大変です。たとえば遊具などに『ゴジラ』の付く名前をつけて訴訟になるケースが、世界中に山ほどあるように、『ゴジラ』という名前は、簡単につけられるものではないのです」と諭されてしまいました。「では、使

用料をお支払いすればいいでしょうか？ いくら位だと借りられますか

ね？」と別の知人に聞くと、驚くこ

とに答えは「2千万円」でした！ 名前だけで2千万円では到底ダメだと思いつつも、東宝映画の社長に手紙を書き、交渉にまいりました。社長は「ゴジラはうちの持ち物ですよ。なんであなたに名前を貸さなきゃならないのですか！」と、顔を強張らせておっしゃいました。私は内心、「何もそんなに怒らなくてもいいのに」と思いつつも、仕方がないので『スポーツゴジラ』か『スポーツゴリラ』にしようかと、再度、考えを巡らせていました。

それから2日後、ある出版社のパーティーに出席しました。すると、あの社長もいらつしやっているではありませんか。気まずいとは思いましたが、お会いしたからには、ご挨拶するしかありません。妙な空気が流れる中、社長が水割りを片手に、「だからね、ゴジラという名前はね……」と、また一から話を始められたので、「分かりました、分かりました」と聞き続けていました。

「それからさらに一週間後のことです。東宝から電話があつて「社会貢献のためなら、ゴジラの名前をお貸ししましょう」との申し出があつたのです。心の底からびっくりいたしました。誰かに何かを言われて気持ちが変わつたといったことではなかつたようです。私は、おそらく夢にゴジラが出てきて、社長様の足を踏みつぶしそうになつたのではないかと推測しています（笑）。奥付を見ていただければ分かりますように、『スポーツゴジラ』名前の下にクレジツトマークが入っています。この雑誌でしか使えないということです。そして、2年おきに「名前をお貸しいただいて、ありがとうございます」という挨拶をして、貸していただいています。

考えてみますと、『スポーツゴジラ』という名前の母親が東宝ならば、父親は、「大きな名前にしなさい」とおっしゃつた山下泰裕さんなのではないかと思えます（笑）。おかげさまで、一度聞いたら忘れない名前になりました。

さて、問題はこの雑誌の内容です。それについても、あれこれと考えながらここまでやってまいりました。山下先生はお忘れかもしれませんが、中国でオリンピックをやるとは

どういふことなのかを考えながら現地でご活動していた山下先生にお話を伺ったこともあります。また、そちらにいらつしやいます光本健次先生の活動も取材させていただきました。戦争のこと、スポーツを通じた交流のことなども踏まえて、南京や青島のことをどう考えるかについてお話しいただき、一冊にまとめました。表紙は山下先生の写真です。

この写真は、「山下先生、お写真を撮らせてください。顔を洗って、濡れたまま出てきてください」とお願いし、私が撮ったものです。少し粒子は荒いのですが、すごくいい男に撮れちゃいました(笑)、後々、プライベートなお写真としても使ってくたさっていたと聞いています。

戦争の時代に日本はどのようにスポーツがかかわってきたか

こうして、『スポーツゴジラ』はついに20号までたどり着きました。この20号では、「スポーツと戦争」というテーマに真正面から取り組んでいます。皆さんにもお持ち帰りいただきたい、ぜひ読んでいただきたいと思います。実は今回、ページ数が増

えて厚くなつてしまいました。厚くなると印刷経費が膨らんで大変なのですが、どうしても載せたい記事が多かったのです。

今回は、男子サッカー日本代表の監督であるイビチャ・オシム氏について取り上げています。彼は旧ユーゴスラビアのご出身。旧ユーゴスラビアは7つの隣国と国境を接し、5つの民族、4つの言語、3つの宗教

2つの文字を持つ、極めて複雑な国といわれています。ついこの間まで戦場にもなつていた所です。そこでオシムは、サッカーで民族の融合を果たしたいと考えていました。日本でも極めて優秀な監督でしたが、こうしたさまざまな思いを抱いていたことを知り、木村元彦さんという方に記事を依頼しました。木村元彦さんは『オシムの言葉』という40万部を超えるベストセラーを執筆した方

です。この人に書いていただくのが一番いいと考え、何とかお願いして書いていただきました。それが今回の巻頭記事になっています。木村さんは原稿用紙にして8枚、とても気合を入れて文章を書いてくださいました。

冒頭で木村さんは、日本人にとつてとても大事なことだと、私が思っていた精神主義について書いてくださっています。「海軍を模して監督した結果、日本一になれた」などとコメントされる野球の監督さんがよくいます。つまり、命令が一つでも間違えば、海軍の船は沈没してしまう。野球も同じだということなのでしょう。

でも、私はそういうコメントに出会う度、「はて？」と思つていました。「勝手なことは許さないよ」というお話なら、なにも戦争時の話を持ち出さなくてもいいだろうと思つていたからです。また、「韓国は38度線で分かれて戦つたから、精神が鍛えられて強くなった」という人もいます。これも、果して本当でしょうか？

平和ボケしている日本人とは違うと言いたいようですが、韓国人は徴兵制があるから強いのではなく、オリンピックやワールドカップに出場すると徴兵が免除になるから強いのではないのでしょうか。こうしたまったく違う角度からの視点を忘れていたのではないのでしょうか。クロアチア共和国のザグレブ・サッカー協会の人が「内戦があるから

サッカーが強いのなら、自分たちは喜んで弱くなる。できればそんな立場に変わりたくない」と言っていました。スポーツのことをよく分かっている人は、戦争の話を持ち出して強さの秘密を語ったりはしないのではないのでしょうか。そんな疑問に答えてくれたのが、今回のオシムの原稿でした。

「あなたは隣人同士が殺し合いをさせられた、むごい内戦を乗り越えた。あなたのサッカー監督としての肝力・英断力は、そういった艱難辛苦を乗り越えることで鍛えられたのでは？」という問いに、オシムは「あったかもしれないが、言葉にするとき、それは無かったというようにしている。そこから学んだということ、そういう戦争が必要なものになつてしまう」と語っています。見事なお

答えをいただいたと思います。この言葉が載っているページには、一枚の写真相が掲載されています。大きなお鍋に入った料理のようにも見えますが、これはオシム家に飛んできた弾丸をクッキーの缶に入れてあるカセットです。これを、わが家の宝だと言つて見せてくれたのでした。

オシムは民族間の軋轢にも屈しませんでした。また、マフィアに「この選手を使え」と再三脅されても、従わなかった。「最高のサッカー監督は？」との問いに、旧ユーゴスラビアという小さな国の監督であるにもかかわらず、「イビツァ・オシム」と答える声が、多くの国の人から聞かれました。

この長い記事のおかげで、今回の印刷費は予定より9万円も上つてしまいました。内心「まいったな〜」とも思いましたが、もちろん、掲載してよかったですと思っています。世の中に溢れるスポーツ関連の本や雑誌や情報には、売れるか売れないかのフィルターがかけられ、売れるものもいいもので、売れないものが悪いものだと評価されてしまいがちです。また、売れなければ、生き残っていないのも難しい。しかし、『スポーツゴジラ』は、儲けという基準を度外視したフリーペーパーです。スポンサーも立派な企業が付いてくださっていて、口を出さずにお金を出してくださっています。しかも「今回はこれがよかった」「あれが面白かった」という言葉をかけてくださる、とて

もありがたい存在です。

そして、この20号には元プロ野球選手の張本勲さんにも登場していただきました。日曜日の朝、関口博さんと一緒にテレビ番組に出ている「かあくつつ(喝)！」と大きな声で叫んでいる、元気なおじいさんです(笑)。彼は素晴らしい選手でしたが、実は被爆体験をお持ちです。長い間それを隠していたのですが、最近になってその体験を語り始めたのだそうです。というのも、テレビで20歳前後の若者が「自分には戦争なんて関係ない」「原爆がどこに落ちたかなんて知らない」というのを聞いて、これは大変な時代になったと感じたのがきっかけだそうです。戦争体験を語り継ぐことは自分たちの世代の人間にしかできないと考えたのだそうです。張本さんは5歳の時に被曝しました。ご本人は今もお元気ですが、友人やお姉さんなど、大切な人を多く亡くしています。「安打製造機」と言われた張本さんは今年、広島のマツダスタジアムで行われた始球式に初めて出ました。その会場で、そのことについて語っています。今回掲載したもう一つの記事です。

ここで、少し時代をさかのぼらせてください。1934年(昭和9年)のことです。静岡県の草薙球場(静岡県草薙総合運動場硬式野球場)で珍しい野球の試合が行われました。米国大リーグが日本にやってきたのです。大リーグチームは、4つの試合で60点を取るほどの圧倒的な強さでした。第8戦では21点をたたき出していきます。そして、第9戦目に、

まだ少年とも思える17歳のピッチャーがマウンドに上がります。ついこの間まで高校球児だったようなピッチャーなので、「スクール・ボーイ」と呼ばれたのですが、実はすごい速球の持ち主で、すくと落ちるドロップも得意でした。

彼は大男ばかりの大リーガーを4者連続3振に取ります。1番ゲリッジャー、2番ルース、3番ゲリッグ、4番フォックスでした。6回まではわずかに2安打。7回でゲリックに外角高めをライトに持っていかれて1点を取られますが、なんと、0対1で惜敗します。「なんだ、負けたのか」とお思いになるかもしれません、それまでは一試合で21点も取られていたのに、この試合だけが

0対1だったのです。ここから日本のプロ野球は始まりました。プロの大リーガーと、子供みたいに扱われていた全日本とが戦って、いつか勝てる日が来るのだろうか……。その第一歩が、この試合でした。

後の新聞で米国人記者から、「目もくらむような速球を投げた。今日からでも大リーグで通用する」と称賛された少年のようなピッチャーは、沢村英治という男でした。皆さん、お名前はよくご存じだと思います。

私より先輩の方たちにはなじみ深いかもしれない。私もスポーツライターとしてやってまいりましたので、沢村が戦争で命を落としたことは知っていました。ただし、何度も戦争に行つたことまでは、知りませんでした。

彼は7人兄弟の長男で、小学生時代はピッチャーではなく、3塁手でした。球が速すぎて、キャッチャーをできる子供がいなかったからです。そこに山口千万石君という男の子が転校してきて、キャッチャーをやってくれるようになったおかげで、沢村はピッチャーになることができました。その後、2人は京都商業に進

学し、そこでもバッテリーを組みます。山口君は、その後も野球を続け、審判員なども経て、90歳以上まで長生きしました。

沢村のボールを一生懸命受け続けた山口君は何度も指を骨折していたことが理由で、徴兵を免れました。

そんな指では銃の引き金を引けないだろうと判断されたことで、元気に長生きできたのです。しかし沢村は、そうはいきませんでした。祖父が商売に失敗したこともあり、家が貧しかったのです。7人兄弟の長男だった彼は慶應義塾大学への進学をあきらめ、職業野球をしようと「大日本東京野球倶楽部（後・東京巨人軍、現・読売ジャイアンツ）」に入団しました。彼の活躍は目覚ましいものでしたが、その後、2年3ヵ月もの間、兵隊に取られます。彼のピッチャーとしての優れた素質は、戦争では手榴弾を投げるのに利用されてしまいました。手榴弾は野球ボールの5倍以上もの重さがあったそうです。何度も練習した結果、普通の人は40メートルも飛ばせないところ、彼は80メートルも飛ばせるようになったそうです。しかし、これで肩を壊し、マ

リアにもかかってしまいました。

日本に帰ってきた彼は再び野球を始めるのですが、足を高く上げてものすごい剛速球やドロップボールを投げていた頃とはまるで違い、見たこともないような横手投げになって、だんだんと体が壊れていきます。

その後、再び戦地に赴きます。今度は1年3ヵ月でなんとか帰ってきましたが、さらに3度目がありません。1944年12月1日に門司港を出て東シナ海へ向かう屋久島西約150キロの台湾沖でアメリカ軍の爆撃を受け、船は沈没。2100人亡くなった中に、沢村もいました。

今回、記事を書くにあたって、一生懸命調べ物をしました。東京ドームに行ったことがある方は少なくないと思いますが、そこに野球博物館があるのはご存じでしょうか？博物館の前にある階段を下りると戦没者の鎮魂碑があり、69人の名前が刻まれています。その中に沢村の名前もあります。人の目に触れることほとんどない碑です。東京ドームに行かれた際には、階段を下りていただいて、ぜひご覧いただきたいと思っています。

野球を本当にやりたかった沢村が

いました。また柔道が本当に好きな山下先生も、ボイコットによってモスクワ五輪に参加できませんでした。他にもいろいろなたスポーツをやりたかったのに、戦争によってできなくなってしまうた命がたくさんあると思います。沢村が27歳で亡くなる前、奥さんが「あなた、戦争を怨まないの？」と一度だけ聞いたことがある

そうです。彼は、何も答えなかったといひます。言っても仕方がないと思つたのか、胸につかえている言葉を吐露するのが辛かつたのか、それは分かりません。ただ、今回の20号では、スポーツが戦争によって奪われた時代があつたことを、はっきりとお伝えしたかつたのです。野球はその象徴ですが、他のどんなスポーツでも同じだと思ひます。

1945年の終戦後、敵国のスポーツと言われた野球は日本中に広がっていきます。ご存じのように、3角ベースボールです。終戦を告げる天皇陛下による玉音放送を、千葉の片田舎で聞いていた少年がいました。「チビ」と呼ばれる小学校4年生のその少年は、「さあこれで野球がで

きる！」と喜んで、母親にボールを作ってもらつたそうです。ビー玉に帯留めを巻いて作るのですが、帯止めは硬いので丸くするのは大変です。少年は母親の横で「丸くしてね」とお願いし、お母さんも血だらけになりながら一生懸命作つてくれたそうです。そうして作つてもらつたボールでホームランを打つた子供が、後の長嶋茂雄さんです。

長嶋さんはプロ野球で大活躍し、「巨人軍は永久に不滅です」という有名なフレーズを残して引退されました。最後の試合は、沢村英治が17歳で大リーガーを翻弄した、あの草薙球場で行われました。沢村がプレーをした40年後の日にも全く同じ11月20日でした。この時は、来日した大リーグ・ナショナルリーグのニューヨーク・メッツとの試合でした。終戦とともにやりたかつた野球を思う存分してきた長嶋茂雄と、27歳で戦争の犠牲になつた沢村英治には、不思議な接点がありました。ご存知の方もいらつしやると思ひますが、調べながらこうした事実が分かつた時には、とても興奮しました。やりたいことが捻じ曲げられて、

やらせてもらえなかった時代があった事実を、多くの方に噛みしめていただければと思います。この会場には大学で柔道をやっていると知られる学生さんがいらつしやいますが、

「お前、体が大きいから一番前で手榴弾投げてこい」と言われて、あつという間にこの世から姿を消してしまふ可能性が、あの時代にはあつたことを、忘れないでほしいですね。

沢村は、海の藻屑となつてしまいました。山下先生の203連勝には、みんなが震えました。全日本9連覇にも湧き、涙しました。最後にラッシュワンの足の痛い山下先生を支えてくれたシーンも映像などで残っています。たくさんの感動をいただきましたし、今でも山下先生の現役時代を思つて胸が熱くなることもありまふ。そんな山下先生でさえ、もう少し前の時代に生まれていたら、海の藻屑になつていたかもしれないというところをお伝えしたいと思います。

スポーツを通じた国際交流の可能性

音楽や料理と同じように、スポーツをツールとしてコミュニケーションが図れることは、とても素晴らしい

ことです。さまざまな国の方たちを受け入れて活躍している東海大学も、スポーツによつて国際交流できる今の時代も、本当に素晴らしいです。外交的な対立がある国の人々をイメージで判断することなく、スポーツを通じて「自分の友人は、こんな人で、こんないいところがある」といった交流が実現し、より良い関係を築いていけたらいいなと思います。それができればスポーツは最高ですし、戦争もなくなるのではないかと思います。また、なくなることを願っています。これが、山下先生に長い時間をかけて教えていただいたことです。表現の仕方は私の方が少し幼稚で稚拙かもしれませんが、山下先生がお考えになつていふことも、私が身を持って学んだことも、一緒であろうと思ひ、本日は皆さんの前でお話させていただきました。

これから、硬派な雑誌を作り続け、『スポーツゴジラ』も百号まで出すところと思ひつています。百号が出るころには、私は80代になつていふはずですが、皆さんも、半分くらいに減つていふかもしれない（笑）。駅などで見かけた際は、ぜひお手に取つ

て読んでいただきたいと思ひます。儲かるか儲からないかという価値観で仕事をするのは、私はもう卒業しようと思ひます。私はスポーツからたくさんのことを学びました。今後、その恩返しを少しでもやつていければいいなと思ひます。ご清聴いただきましてありがとうございます。

光本…ありがとうございます。時間があまりございませんが、ご質問のある方は、手を上げてお願いいたします。どなたかいらつしやいますでしょうか？

長田…こういう場で質問するのは、難しいですよ。よく分かります。山下先生、何かございませぬか（笑）。

山下…大丈夫です（笑）。
光本…皆さん、よろしいですか？ ではこれで、終わらせていただきたいと思ひます。長田さん、どうもありがとうございます。いま一度、拍手をお願いいたします。それではお時間となりましたので、最後に本法人副理事長の橋本敏明より、閉会の挨拶をさせていただきます。

橋下…ただいまご紹介をいただきました。副理事長の橋本でございます。長田渚左さん、本日は素晴らしいお話やたくさんの裏話を、ありがとうございます。長田さんにこそ、お話のうまさの秘訣をうかがいたいくらいです。皆さんにとつて、貴重で楽しい1時間であつたと思ひます。私は生まれが広島で、子供の頃には張本さんが歩く姿をよく目にしていました。また、姉の家が張本さんの家のすぐ近くでした。あるとき張本さんは、道の真ん中を威張つて歩いていふあと、懐かしく思ひ出しました。「張本さんはあまりにも元気がよすぎて広島にいられなくなつたのか、大阪の浪商へ行つてしまつた」と、町の人は言つていました（笑）。テレビなどで見ると、そんな昔のことを懐かしく思ひ出しています。先ほど大きな地震がございましたが、この地震による被害がないことを祈つております。今日は、1年前に東日本大震災での体験談をご講演いただいた宮城県「豊里柔道クラブ」

の寺澤豊志先生もおみえです。先ほど、寺澤先生に、「大丈夫か？」と電話をかけましたら、「これから山下の講演会だ」という返事でした。振りむいてみると、すぐ後ろに寺澤先生のお顔がありました(笑)。皆さま、今日お帰りになって、あの地震のときはどこにいたのかと尋ねられたときは、NPO法人柔道教育ソリダリティーの講演会にいたとお話してください。私どもの宣伝にもなりますので、どうぞよろしくお願いいたします(笑)。

今日は12月7日ですが、あと3日後には、ストックホルムで本年度のノーベル賞の医学・生理学賞を受賞した山中伸弥さんの表彰があります。私たち日本人にとっても、大変名誉なことでは喜ばしいことですが、この山中教授は、中学時代に柔道をやっていたのですね。新聞にも柔道着姿の写真が載っておりまして。高校からはラグビーに変わられたそうなんです。研究活動には大変お金がかかるので、近年ではカンパを集めるのにマラソンに出場しているそうです。この話を新聞で知って、本法人も資金がなくなった際には一同でマラソン

大会に出場し、「NPO法人にご支援を！」と言って走るのがいいかもしれないと思いましたが(笑)。山下先生を筆頭に、井上康生君などもいますから。会場の皆さんも、御賛同いただける方には、一緒に走っていただきたいです。(会場より拍手)「スポーツを通して、平和のために」というスローガンを掲げてデモンストレーションをしてみてはどうかと思っただ次第でございます。

ともあれ、山中教授が中学時代に柔道をされていたことが、その後の研究にもきつと生かされている。そういう力が、柔道にはあると思います。2016年のリオデジャネイロオリンピックに向けて、井上康生君が男子代表の監督になり、競技指導者として頑張っています。柔道の経験は、人生を支え得る。それが世界の平和にもつながっていく——というのが、嘉納治五郎師範が心から望んでいた柔道の道ではないかと思えます。本法人はささやかなNPOですが、その心を忘れず、これからも努力してまいりたいと思っております。ご支援のほど、何とぞよろしくお願いいたします。

本日は大変お忙しい中、このようなさやかな講演会にお集まりいただきまして、ありがとうございます。長田先生にもう一度感謝を申し上げます。閉会とさせていただきます。皆さま、どうもありがとうございます。した。

光本：本日は本当にお忙しい中、たくさんの方にお出でいただきまして、心から御礼申し上げます。本法人は大変小さな組織ですが、皆さまと手をつないで、少しずつではあります。活動を展開していきたいと思っております。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

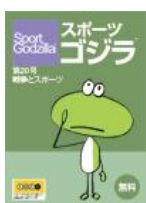
* * *

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局0463(58)1211(内線3524)までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。また、ホームページからもダウンロードすることが出来ます。

【<http://npo-fjs.jp/>】

* * *

講演会で長田さんがお話になっている『スポーツゴジラ』の購読について



特定非営利活動法人スポーツネット
ワークジャパンホームページをご覧ください。
スポーツゴジラの主な配置場所、申込方法などが記載されています。

【<http://sportsnetworkjapan.com/>】